

# 夏の日の

象潟町

小滝温水路

# カスケード

写真・文

津島 修三

〈秋田市在住〉



田んぼに引く水がカスケード（階段状の滝）になって流れていく。鳥海山西北山ろくのところどころに見られる特徴的な光景だ。観光スポットではないが少しほし見とれてしまふ、秋田が誇るべき美しい田園風景の一つと言えるだろう。

写真は象潟町の小滝温水路

鳥海山は天然のダムである。広大な山域に降った雨や雪は、溪谷を伝って大地を潤し、あるいは伏流水となって日本海沿岸の海底から湧き出でて秋田の夏の味覚である天然岩ガキをはぐくんではいる。

この清れつな鳥海山の水は、しかし山ろくの農民たちには憎い存在でもあった。水温が冷たすぎるのだ。象潟町の鳥越川の上流域では真夏の八月でも平均水温が10度程度。一般に、田んぼに入れる水が15度以下では米に生育障害が現れるという。実際、象潟町の上郷地区では、かつては米の収量が上がり、水口付近には苗を植えない「犠牲田」をつくったりもしていた。

大正十五年に鳥越川上流に水力発電所ができる。延長3キロのトンネルを流れてきた水はさらに冷たいものとなり、電力会社は鳥越川流域の集落に補償金を払うことになった。旧上郷村長岡集落の篤農家で理事者（地区長）でもあった佐々木順治郎は、この補償金を元手に一計を案じた。それは、農業用水路の幅を広げ、水深を浅くし、さらに階段状にして流れを緩くして、水が太陽に当たっている時間を長くして少しでも水温を上げようという独創的なアイデアだった。こうして昭和二年に完成した長岡温水路は、順治郎の狙いが見事に的中。近隣の集落でもこそって温水路の造成を手掛け、最大8度以上も水温を上げることに成功したところもあった。

小学校しか出ておらず、とりわけ学問があつたわけでもない一介の農民にすぎなかつた順治郎のひらめきから生まれた温水路は、日本で最初の着想であり、やがて象潟町その他、金浦町、仁賀保町にもこの手法は広がり、さらに全国にも同種の施設を誕生させている。

象潟町横岡水岡に住む佐々木ヨリさん（八十三歳）は順治郎の孫娘。「おじいさんにはとてもかわいがられた。優しい人だった」と、昭和二十七年に七十歳で亡くなった順治郎を懐かしむ。同町長岡集落に住む齋藤ナリさん（八十歳）はヨリさんの妹。「父親は早くに亡くなったけれども、おじいさんがとてもよく面倒を見てくれたので寂しく思ったことは一度もなかったと言う。なにしろ酒と馬が好きなんだ」と、ニコニコしながら振り返る。決して裕福な暮らしぶりではなかつたようだが、馬産家として馬をこよなく愛し、いつもご機嫌に酒に酔い、そして孫娘たちをとても慈しみながら育てた順治郎といちやんであつたようだ。

このあたりには「さなぶり普請」というものがあり、毎年六月第一土曜日には地区の人たちが総出で温水路の清掃や草刈りをす。佐々木順治郎という人は、勲章をもらうような大人物ではなかつたかもしれないが、それよりもっと大切なものを、のちの人々にのこしていった人だったのかもしれない。